

「文学部」の問題

— 高橋健二と東京帝国大学 —

高 田 里 恵 子*

有名人との付き合い

個人的な体験を書くことで、ある時代の像を描きだすことができる幸福な（あるいは不幸な）人たちがいる。言いかえれば、世代論という多少いかがわしい代物を見事に成り立たせてしまう世代が確かに存在するのである。たとえば『回想の文学』や『昭和時代』を書いた中島健蔵もそのような者たちのひとりであった。1903年生まれの中島は、今世紀の初頭に生をうけた自らの世代を、1901年生まれの昭和天皇も含め、あるいはこの人物にこそ因んで、「昭和」の人間と呼ぶ¹⁾。明治の生まれとはいえ、漱石や鷗外の明治は知らず、何より日露戦争後に育ち、いわゆる大正デモクラシー・大正リベラリズムの空気を存分に吸い、やがてマルクス主義運動の嵐のあとに「昭和時代」を体験した世代。しかも、戦後は多くの「進歩的文化人」を生むことになるこの世代は、そうした「昭和時代」の責任を他の誰かに負わせることができない世代でもある。中島健蔵が『昭和時代』の記述を、実際には大正時代の出来事である関東大震災の時の体験から始めているのは偶然ではない。もちろん、そこで問題になっているのは、家屋の倒壊や火事などではなく、「民衆」の手によるあの虐殺事件であった。それが、「昭和時代」の始まりである。

中島健蔵が意識的に行ったこと（従って、そこに意図的な隠蔽もないわけではない）をまったく無自覚に行うことで、一層鮮やかに「昭和時代」を描

* 本学文学部

キーワード：① 東京帝国大学 ② ナチス文学の紹介 ③ 大政翼賛会
④ 自由主義 ⑤ ジャーナリズムとアカデミズムの対立

きだしているのが、中島より一歳だけ年上の高橋健二の自伝『万華鏡』(1978年)である。読売新聞に自伝の連載を勧められた高橋は、「自分の過去を振り返って見ると、至って平凡で、語るに足るようなことに乏しいので、引き受けるのをためらっていた」²⁾という。「戦場を知らない。また中学以来病気らしい病気をしたことがない。震災や戦災にも無事であった」²⁾というわけなのである。自伝の執筆を頼まれるような人物の人生が「平凡」「無事」であるとは、無論、謙遜の言葉であろうが、戦時中ナチスの肯定的な紹介者として活躍し、また大政翼賛会文化部長を務め戦後の公職追放をも体験した高橋健二にとって、本来は使うことのできない表現であるはずだ。ある時代を見てきたことをあまりにも強烈に(いやみたらしく)自負する中島ならけっして使わない、この「無事」という言葉の中に、高橋健二が無意識的にけっして見まいとしたことが隠れている。

もっとも、高橋健二が大政翼賛会に関わった事実を隠蔽しているということではない。たしかに『万華鏡』の目次を眺めると、第五章「太平洋戦争まで」の次は第六章「戦後」となっており、意図的な省略がすぐに目につくが、しかし大政翼賛会文化部長であったことや公職追放の件はけっして隠されてはいない。むしろ、こうした体験は、「私に話題があるとしたら、内外の一流の人物の多くに接触できたことにちなんでいる」²⁾と前書で述べているとおり、「一流の人物」(おおむね文学者)たちとの付き合いによって得られた貴重なものとして誇らしげに記述されている。大政翼賛会文化部長には、尊敬する山本有三や岸田国土に推されてなったのであり、この職を通じ、菊池寛や横山大観などの大物との付き合いも始まった。さらに戦後は、同じように「追放を食った」³⁾菊池寛の無聊を慰める良き話相手の務めすら果たすことになる。高橋健二がこのように楽しげに・誇らしげに文化部長時代を語るのは、別に高橋が恥知らずだからではなく、大政翼賛会、特に、岸田国土が高橋健二の前の長をつとめることになった文化部の性質じたいに根ざすのだが、それについては後に触れることにしよう。

高橋健二はこのように日本やドイツの有名文学者との付き合いを売り物に

「文学部」の問題

してきた。しかし、そうした才能ある人物たちと自分とのあいだに厳しい一線を設けるということが、彼の倫理に基づく態度であった。高橋健二は1977年7月、ちょうど大政翼賛会文化部長を引き受けた1942年7月から35年後に、日本ペンクラブの会長になっている。この時も、すったもんだの末の「貧乏クジをひいたような」⁴⁾かたちでの就任であったが、会長職をいったん辞退した理由は「74歳の老齡だし、創造的な仕事をしていないから」⁴⁾というものだった。高橋健二をめぐって、たとえば大政翼賛会文化部とペンクラブとの（もちろん悪い意味での）連続性を言いたてることも可能かもしれない。実際、高橋新会長が「ペンは剣より弱いかも。が、こうして弱いペンが集まって表現の自由のことでゴチャゴチャやっていたら、それだけでも権力者には目障りでしょう」⁴⁾と誇らしげに言うとき、かつて迫りくる文化統制の最後の防波堤の役割を担って大政翼賛会文化部長に就任した「自由主義者」岸田国土の意志をつごうとした高橋文化部長の悲喜劇的な運命を思い出させるだろう。しかし、文化部長とペンクラブ会長就任に関する本当の共通点は、「創造的な仕事をしていない」と正しい自己認識をもった高橋健二がどれだけ献身的に、創造的な仕事をする作家たちに尽くしたか、というところに在る。かつて山本有三の指示に黙って従ったように、ペンクラブでは川端康成のために縁の下の力持ち的な役割に喜んで徹したのだった。大政翼賛会文化部や文学報国会を維持できたのは、ただこのような美しい無私の心をもった従僕のみなのである。

アンチ帝大

ここで、やはり山本有三との関係で付き合いができた芥川龍之介から、高橋健二がたった一通だけ受け取ったという手紙の末尾を引用してみよう。1924年（大正13）秋、当時、高橋健二は東京帝国大学独文科の学生であった。

実はあなたのやうな好学の士をお客に招き、大いに啓発されたいのですが、生憎さう云ふお客は滅多に来ません。大抵は文壇の毒瓦斯を愛する他

称文学青年，自称将来の作家に悩まされてゐます⁵⁾。

芥川がここで正しく見抜いているように高橋健二はつねに分をわきまえていたし、分をわきまえていない「文壇の毒瓦斯を愛する他称文学青年，自称将来の作家」を，ことによると芥川よりなお一層，憎んでいたかもしれない。高橋はさらに，芥川が「私（高橋健二…引用者）の友人たちの創刊した同人雑誌を，あれはもうだめだ，と一言のもとに否定し去るといふふうであった」⁶⁾と報告しもするのである。この雑誌とは第八次「新思潮」と思われるが，たとえば，戦後に東大独文科教授となる手塚富雄（1903年生まれで，一高・大学で高橋より一学年下であった）も学生としてこの同人誌に参加していた。手塚じしんは後になって，「学生の眼からは，当時の大学の先生はアカデミズムの神さまであり，同人雑誌や創作にかかりきることは，先生にとっては許しがたい異端にちがいないと，こちらからきめてかかっていた」⁷⁾たと当時の帝国大学の模様を語っている。これが，手塚が文学辞典などで「アカデミックな気風の濃かった日本ドイツ文学界に清新の風を吹き込んだ」⁸⁾などと記述される所以である。手塚が上記のような思い出を語る同じ本の中で，しかもそれは最後の東京帝国大学独文科教授木村謹治を追悼する本なのだが，やはり東大教授の佐藤晃一が若き日の「創作」への思いを，つまり帝国大学「文学部」の研究への違和感を語っているのは偶然とは思えない。ここで主流が変わったことが高らかに宣言されているのである。もっとも，重要なのは，手塚が（もちろん佐藤も）挫折した「文学青年」であることのほうかもしれない。ついに主流にはなれなかった高橋健二が，「いかにも大学教授らしい品格をそなえている」「手塚さんは，世間の常識から見て，学歴，履歴とも最高といえる。いやみなことばだが，秀才でエリートである。それにもかかわらず，すぐれた文学者である」⁹⁾という奇妙な誉め言葉を使うとき，実は「文学青年」手塚の挫折を密かに嗤おうとしているのではないだろうか。

若い高橋健二もまた手塚富雄と同じように帝大アカデミズムに違和感を覚

「文学部」の問題

えていたが、その内実は違っていた。高橋は、自分にはもたない特権的才能を、自分にはそれにはけっして関わることはできないという厳しい自覚のもとに、尊敬し称揚する（この過剰な尊敬のせいで、高橋健二の仕事は基本的にはすべて「偉人伝」の性格をもってしまう）。自分も「創造的な仕事」をしようなどという大それた望みを抱かなかった高橋は、しかし、特権的才能の「創造的な仕事」に少しも理解を示さないように思われる当時の帝大独文科教授たちにもなじめなかった。『万華鏡』では、次のように記されている。

在学中の終わりの年を前に、ダールマン先生が定年で去られ、上田整次教授が急逝され（大正13年春…引用者）、オーフェルマンズ先生と木村謹治助教授がそのあとを継がれた。私は青木昌吉教授、木村助教授、オーフェルマンズ教師、新関良三講師のもとで昭和二年度まで副手を勤めた。教授陣の変わり目にあたったので、一貫して教えを受けた教授がなく、なんとなく腰が落ちつかなかった。

そのころ（大正11年から昭和2年ころ…引用者）厭世的で、ひとりひがんでいたので、教授たちに対しても、自分はままだというような気持ちで、親しまなかった。私の不心得であった。それだけ、学外で山本有三に私淑した。そして大学ではむしろ仏文に親しみを感じた。（中略）そんなわけで私は独文ではいささか異分子であったのに、副手を三年勤めた¹⁰。

ここに名が挙がっている上田整次、青木昌吉、木村謹治の三人の帝大教授は今ではすっかり忘れ去られてしまった。「一流の人物」との付き合いが記述される『万華鏡』に、彼らが登場する余地はない。確かに彼らは一般的な小説や詩集の翻訳を残さなかったし（ただし、これは当時の帝大教授に相応しい在り様であった）、彼らの著書の価値は、今となってはそのものとしてより、たとえば受容史研究のための資料という観点からはかられるべきものだろう。特に、1907年（明治40年）に帝国大学文科大学のドイツ文学講座を担当する栄えある日本人教授第一号となった上田整次を知る人は現在ではほ

とんどいないと思われる。文学辞典にも記載はない。いやすでに当時から、帝大の「上田さん」とは、上田万年か上田敏のことであった。因みに、この同じ年に漱石は教授職を断り、朝日新聞社に入っているのである。

それに対して、高橋健二が「親しみを感じていた」仏文には、辰野隆や豊島与志雄がいたし（彼らは『万華鏡』に登場する）、周辺や学生としては、岸田国土、渡辺一夫（1901年生まれ）、中島健蔵、小林秀雄（1902年生まれ）などをすぐに挙げることができよう。「仏文に親しみを感じ」ていたという表現で高橋健二が暗に言わんとしたのは、既成のアカデミズムへの反抗であったが、これはしかし、少々「仏文」を買い被りすぎているようにも思える。中島健蔵ならば、当時の状況をこんなふうにするだろう。「詩人、作家と研究者、学者との間には、奇妙な溝があった。東大のフランス文学科は、やや例外的であったと思われるかもしれないが、アカデミズムのにおいては、私学とは比較にならなかったというのが実状である」¹¹⁾。「東大仏文科の教授、助教授の考え方は、半分文壇に首をつっこみかけていたわたくしから見ると、意外に世俗的だったが、他の学科とはくらべものにならないほど解放的で寛容であったことも確かである。当時の常識における大学教授とは、仏文科の先生方とはまるでちがうタイプの人たちだった」¹²⁾。

こうした「仏文」科教授の、具体的に言えば辰野隆のどっちつかずの中間的在り様こそ、あるいは後の高橋健二の姿であったかもしれない。高橋健二は、いわゆる文壇の苛酷さもアカデミズムの厳格さも回避し、ジャーナリズムの世界ではあくまで素人の大学教授にとどまりつつ、しかしアカデミズムに徹する孤独な勇気もまたもちえなかった。高橋健二が辰野隆を無条件に称賛するのに対して、本来弟子である中島健蔵や渡辺一夫が暗に彼らの師のディレッタント的能天気さを指摘していることを見逃してはなるまい。

大政翼賛会と自由主義者たち

しかし、ここでより重要なのは、こうした高橋健二の東京帝国大学独文科に対する違和感、「権威」に対する反感が、彼に大政翼賛会文化部長への道

「文学部」の問題

を切り開いたということである。まず第一には、もちろん大学外での文壇との付き合い・人間関係が挙げられよう。教授たちには親しめなかったが「それだけ学外で私淑した」という山本有三との関係で岸田国土とも知りあい、すでに触れたように、二人に推されるかたちで、岸田文化部長の後を襲ったのである。安田武は、当時誰もが意外に思った岸田文化部長誕生の裏に、近衛文麿と親交のあった山本有三の推挽を見るのだが、その推論の根拠となるのが、二代目の高橋文化部長就任に関して山本が動いている、というものであった¹³⁾。ところが、古山高麗雄は、山本有三がむしろ岸田の文化部長就任に反対し、「この戦争は、負けるに決まっているのだ、よしたほうがいい」¹⁴⁾と言って、岸田に貧乏くじをひかせまいとしていたという事実を伝え、山本推薦説を否定している。岸田国土の文化部長就任をめぐるには様々な説があるが、今は関係ないのでそれには触れないとして、もし、本当に山本有三が上記のような考えをもっていたとしたら、山本は高橋健二を適当に利用し、そして見捨てたことになるだろう。実際、「戦時態勢の斜面をひた走る国勢の喰いとめ役」¹⁵⁾として、多くの「自由主義的」文化人たちの期待を担って登場した岸田国土が「ファシズム」(?)の前に敗退したあとに、あえてこの損な役回りを押しつけてしまえるのは、高橋健二クラスの人間しかいなかったにちがいない、と容易に想像できるのである。

もっとも、高橋文化部長のほうでは、あくまで岸田国土との連続性を信じていた。独文の「異分子」を自認し、「むしろ仏文に親しみを感じていた」と回想するのは、自分が戦前のあの「自由主義」の陣営にいたこと、つまり真の「自由」と「文学」とを愛する者たちのひとりであったことを仄めかすためなのである。その場合、「厭世的で、ひとりひがんでいた」という高橋健二の東大時代の前後は、左翼運動の盛んな時期で、「自由主義」という呑気な在り様も、左からの攻撃を受けてひとつの試練の時を迎えていたことを忘れてはなるまい。『万華鏡』ではまた、「日本ファシズム」と戦い、のちに起訴されて東京帝大経済学部教授を辞すことになる「自由主義者」河合栄治郎との親交を記述するために多くのページが割かれており、高橋健二は「勤

め先の校長から、河合栄治郎と親しくしていることについて警告を受け」¹⁶⁾もしたという。とにかく、事実として、岸田国土がそうであったと同様に、「自由主義者」の陣営に人脈をもっていたことこそが、大政翼賛会文化部長という災難の原因であった。しかし、すでに何度も触れているように、高橋健二は一方でナチスの文化統制を高く評価する文章を数多く発表している¹⁷⁾。1942年7月に彼が文化部長になったとき、それが順当な人事と見え、特に軍部を納得させることができる人事であったならば、彼がすでにナチス及びナチス文学の紹介者として文化界にある程度の地位を確保していたからにはほかならない。だから、大政翼賛会文化部長に推されてしまったことと、ナチス文化の肯定的紹介者という役回りは、この点では無関係ではないし、今となっではいかにも似つかわしい取り合わせのように見えるだろう。にもかかわらず、この二つのことは実は相反することであった。そして、ここに見られるのは、高橋健二の無節操ぶりなどではなく（彼はその都度その都度で、それなりに誠実であった）、「日本的自由主義者」の曖昧さなのである。かつて戸板潤は、具体的な政治的自由主義に裏打ちされていない自由主義的気分を「文学的自由主義」と呼び、「処でこうした文学的自由主義は、一見意外にもファシズムに通じる道を有している」¹⁸⁾と予言し、見事に的中させた。また、中島健蔵の『昭和時代』には、次のような当時の日記が引用されている。

一九三五年（昭和十年）二月二日

Tのファッションくさい雑文には閉口していたが、それだけならばいい。つまり一方では平気で帝国万歳を唱え、一方ではきわめて自由主義的なものを書く。そこに彼の自由主義の本質があるのだ。だれだかが、彼はつぎからつぎへと論旨の撞着にかまわずいろいろなものをよく書く、といていたのはたしかだ。順調に暮しているディレッタントのくせだろう。自分の心に警戒があれば、あれほど天真爛漫にはなれないはずのものだ。左翼が彼を敵と考えるのは当然だが、真の自由主義者も、彼の中に半分の味方と半分の敵とを感じる。そして、おそらく右翼は、彼を自分たちのなかま

「文学部」の問題

とは見ないが、便利な人間、利用できる人間と考えるであろう。自由主義と、右翼くさいものとのが、雑居しているならばまだいいが、結婚しているのだからどうにもならない。われわれの年長者の中には、こういうタイプが意外に多い¹⁹⁾。

この「T」という人物が（イニシャルの一致にもかかわらず）直接、高橋健二を指すわけではないが（辰野隆か？）、上記の言葉はそのまま高橋にあてはまるだろう。「自由主義」とファシズムとの「結婚」という奇妙な日本の状況、日本の「知識人」のこうした曖昧さを描きだすためのモデルとして、大政翼賛会文化部長高橋健二ほどふさわしいものはない。しかし、この点については別の機会に詳しく論じたいので、ここではさらに高橋健二と帝国大学独文科との関係を見ていくことにしよう。注目に値するのは、次のような事実だ。つまり、大政翼賛会に関わることもナチス文化の紹介者としてジャーナリスティックな活躍をすることも、ともに独文科の主流に反するという点では共通点を持ち、「異分子」を標榜する高橋健二を特徴づけるものであったはずなのだが、ところが、帝国大学のほうからこの「異分子」にすりよってきたのである。

漱石の影

「文学」と「文学部」のあいだの距離を嘆くということは、何も高橋健二の発明品ではなく、大学制度が始まって以来の凡庸すぎるトポスであろう。もちろん、こうした嘆きは作家たちからではなく、他ならぬ「文学部」関係者から発せられるのが常である。とりわけ、東京帝国大学独文科の最初の二人の教授をめぐっては、この種の話しかないとってもよいくらいだ。その二人の教授、上田整次も青木昌吉もかなりの変人で、文壇や学界はもとより、世間一般との付き合いも好まないタイプだったらしいのだが、「文学部」の問題は、こうした個人の性質からでてくるものではなく、近代日本の歪みそのものに関係しているのである。

日本の産業化・近代化に直接は貢献しえない「文学部」（ここでは文学部文学科の意味で使用する）の地位は、帝国大学の中できわめて低かったうえに、西洋文学を範とした近代文学の成立じたいは、帝国大学とは無縁の場所でおこったため、「文学部」の無能は二重に証明されていた。さらにここに独文科固有の問題が付け加わる。つまり、西洋化をめざす近代日本の中でドイツ語じたいは重んじられていたので、語学教師養成所としての機能は認められていたのである。しかし、この語学教師という小市民的安定がまた、「文学」に関わる「知識人」にとって、一種の自己軽蔑の対象でもあった。このことは、当然、英文科にもあてはまるが、しかし、同じ西洋系の外国文学科でも、始めから「文学」の言葉と見做されたフランス語を扱う部署にはあてはまらない（文献学的方法の可能性が残されている国文学科にとってはそもそも無縁の話であろう）。なぜ高橋健二が「仏文に親しみを感じていた」とわざわざ言ってみせるのか、ここにもひとつの理由がある。

よく知られている漱石のエピソードに、イギリス留学の目標を「英語研究のため」と通達された、高等学校の語学教師夏目金之助が、「では文学を研究してはいけないのか」と文部省にわざわざ聞きにいったというものがあるが、この話は、当時の日本における「文学」と実用（西洋）語学との落差をよく表していると言えよう。そして繰り返せば、これは、産業や国家の発展と結びついた西洋系語学であった英語とドイツ語にのみあてはまるのである。²⁰ 「文学」と（西洋）語学の落差などということは、単純で卑俗なもの、漱石の抱えた深い問題性とは無縁のものに思えるかもしれないが、これは、速やかな西洋化に成功した近代日本に特殊な問題であり、「西洋」と「文学」の両方に同時に関わりあった「知識人」、つまり極めて近代日本的な「知識人」にある種の引き裂かれた状態をもたらしていた。苦沙弥先生（『猫』）や広田先生（『三四郎』）もこうした状態にあるとは言えないだろうか。東京帝国大学文学部独文科と英文科は、漱石が英文科の教授職を辞したという以外、近代日本の歴史のなかに何ひとつ見るべきものを残さなかったが、その存在じたいが近代日本の問題点を凝縮していたのである。

「文学部」の問題

独文の最初の留学生・藤代禎輔（藤代が独文科の第一回卒業生で、上田は第二回の卒業生であった）は、やはり「ドイツ語研究のため」という命をうけて、漱石と同じ船でヨーロッパに向かったのだが、彼は漱石の上記のエピソードについて、「夏目君の片鱗」という追悼文の中で次のような感想を残している。「僕は唯西洋に行かれると云ふことが一凶に嬉しくて、腑に落ちない事も何も無かった。君が斯う云ふ際にも内に省みて深く慮る所があるのは、流石だと感じた」²⁰⁾。つまり藤代もまた、自分の求めているものと国家が求めているものとの食い違いをよく知っていたが、たいていの人間ならそうするように、ただそれを見ないようにしたのだった。そして、見ないですまさなければならぬものをあえて見てしまうところに、作家・漱石の「片鱗」を見出すのである。

藤代は、明治40年（1907年）に京都帝国大学の教授になっているのだが、この職も漱石が断っていることは周知の事実であろう。当時、帝国大学の教師の職をなげうって一介の文士になるというのは前代未聞のことであったし、世間的には教授のほうが社会的地位も高かった。しかし、帝国大学「文学部」の内部では、現在と同じように、「作家」は「教授」より一段上のところに位置していたのである。漱石の出現によってそうなったのではなく、漱石という存在はそのことをますます明確にしたにすぎない。熊本の五高時代に漱石の同僚だった青木昌吉は、学生たちにこんなふうに回顧する。「当時夏目君は例の『坊ちゃん』時代の松山からすぐ熊本に来たので、雌伏時代とでも云うか、能ある鷹は爪を隠すという風に韜晦していた。漱石が時に教師はいやだと言うと部下の教授は『君はその外に喰って行けないではないか』と冗談にからかった。しかし私は漱石という人は将来偉くなる人だと思って居た」²¹⁾。一高と帝大で漱石と同僚だった上田整次は、同じように文科大学講師を勤めていた漱石も上田敏も藤代禎輔もならなかった、東京帝国大学（文科大学）の外国文学科の教授席に就くわけだが、漱石に関してもっと複雑な言葉を残している。「漱石の手紙は少しあった筈じゃが、ワシは人から来た手紙はみんな焼きすてることにしているので、一つも残ってをらん」²²⁾。お

そらくこの言葉も、若い学生にかつての漱石との関係を聞かれて漏らしたものであろう。上田も青木も「文学部」の学生に対して一種の敗残者の相貌を隠していないところに、むしろ、東京帝大教授という頂点の地位に昇りつめた者だけに許された余裕を感じさせる。

ところで、『上田整次先生の思出』という小さな本が、昭和31年（1956年）、上田の死後32年もたってから当時の教え子たちの手によって出版されている。このまま、栄えある日本人教授第一号が完全に忘れ去られてしまうのはしのびないという気持ちによってわざわざ作られた本であるにもかかわらず、そこから聞こえてくるのは、上田教授の「文学からの遠さ」を指摘する声なのである。上田が「語学者」として、あるいは「教育者」としていかに優れた人物であったかを語る声も、「文学者」失格を前提としているかのようだ。しかし、ここで注目したいのは、このように記述される上田の在り様がかえって漱石の描く「文学者」たちに奇妙に近づいていってしまうことなのである。それは、上田と違って「文芸運動にも接触されたある時代を持たれ」²⁴⁾た「文学者」²⁵⁾としてこの『上田整次先生の思出』でも時に比較され言及される藤代禎輔が、漱石との近さによって、むしろ決定的に二流の烙印を押されてしまうのと対照的かもしれない。藤代の「文芸運動」との接触の証として現在唯一残っているのは、明治39年（1906年）に「新青年」に発表された『猫文士気焰録』という戯文なのだが、漱石の『猫』に対してホフマンの『牡猫ムルの人生観』の先行を指摘し「吾輩」の突然の水死の原因となったこの作品が今も言及される場を得られるのは、ただ漱石との関係においてのみなのである。

漱石の描く「文学者」とは、世俗の出世や名声を一切望まず地位にも固執せず無理に著作というものを残そうとしない者たちを指す。一高時代の上田にドイツ語を教わったというある者は、はっきりと「偉大なる暗闇」広田先生との類似を言いつのり、「上田先生にも与次郎の如き支持者があったか知りたく存じます」²⁶⁾と続けるのだが、広田先生と違って上田のほうは帝大教授になってしまったという悲劇がここでは忘れられている。またある者は、

「文学部」の問題

漱石の友人であり、迷亭（『猫』）やK（『こころ』）のモデルとも言われる大塚保治との共通点を数えあげてみせる。「当時大学教授間でも、学校の掛持をしない点に於て、労作を教室以外に（著書の形で）、発表しない点に於て、更に金儲けの為に研究の時間を割かうとしない点に於て、美学の大塚保治先生と我が上田先生とが全文科大学中の双璧だった」²⁷⁾。これは、もちろん称賛の言葉であるが、よく考えればおかしい話ではある。ところが、このおかしい話を、かつての弟子たちで今はたいてい新制大学のドイツ文学・ドイツ語教師となっている初老の教授たちが皆で語りあうというのがこの本の内容であり、また目的であり動機であった。「文学」から遠く離れたところに追いやられている帝国大学「文学部」が再び「文学」的なるものへと接近するためには、「文学」の核である「書くこと」を、少なくともジャーナリスティックに「書くこと」を徹底的に拒否しなければならないというわけなのである。またある教え子はこうも言う。「そうしてまた学究肌の人だったと思われるのだが、しかし教え子についての得意話では、山本有三とか藤森成吉など、作家のことにのみであった。或は先生も先ず第一に『歌わぬ詩人』であったのだろうか」²⁸⁾。東京帝国大学独文科が最初からもっていた、あるいはもっていなければならなかった、「文学」からの遠さを何とか正当化すること、あるいは「歌わぬ詩人」でいなければならぬという共通の悲哀と矜持を確認しあうこと、それが『上田整次先生の思出』を秘かに支えている。その本の中で高橋健二はただひとりどこか不機嫌であるが、それも理由のないことではなかったのかもしれない。巻末の筆者紹介のところで、わざわざ「戦時、大政翼賛会文化部長たり」と書くような編集世話人の態度だけが理由ではないはずである。

帝国大学の逆襲

高橋健二のようなジャーナリスティックな仕事のやり方は、別に仕事の対象が一時期はナチス文学だったからという訳ではなく、常に軽侮（と嫉妬）の的となった。上田の死後、上田の唯一の著書、と言っても遺著ということ

になるが、その遺稿をまとめる仕事を行ったのが、当時副手を勤めていた高橋健二だったことは、皮肉な巡り合わせであったと言える。先生の遺稿をまとめるという仕事は誰でも思いつくことであり、なかなかの美談であろう。だが、わずらわしい実務となると逃げだしてしまう者も多いにちがいない。人の好い高橋健二にわずらわしい実務だけが「ふりかゝってきたのである」²⁹⁾。

先生の講義にはおそらく皆勤したというだけで、師の学風に甚だ遠い私はその仕事をしたことは、今もって申しわけないことだと思っている。今でも、あの本が新関先生などのお骨折りによって、充分に手を加えられて再刊されることを望んでやまない²⁹⁾。

言うまでもないが、これはイヤミ以外の何物でもない。このような口調で語る、珍しく不機嫌な高橋健二と並んで、いや高橋以上に一種異様な文章を書き、『上田整次先生の思出』の秘かな（恥ずかしい）ディスクールを堂々とふりかざしてしまう教え子がいる。高橋とは正反対に上田教授への深い尊敬の念に満ちあふれたこの教え子の話の中で語られるのは、上田がその教え子を帝国大学に呼び戻そうと計画していたということなのである。だがこの計画が実現される前に上田は急逝した……「私はもう六十五になる。私の一生はある意味ではもう過ぎ去った。いまこの様なことを公表しても、憚り多いことではないであろう」³⁰⁾。さらに、この教え子は編集子に長い私信を送っており、そのごく一部が、一枚だけ付け加えられている正誤表の余白に紹介され、いささか奇妙な印象を与えている。少し長くなるが、全文を引用してみたい。

もう一つゲエテについて。どういう時のことであったかは、もう忘れましたが、或る時のこと、上田先生と山岸先生とが談しておられました。そこに私が居合わせて、お話を聞くともなく聞こえて来るままに聞いて居り

「文学部」の問題

ますと、上田先生があのお目をじっと見据える様に、シリアスな表情をされまして急に私の注意を惹きました。「それはまだ時機でない。一体誰がそれぞれの分担をするか。そんな人はまだ揃って居らん。飛んでもないものを出せばそれは原作を傷つけるだけになる——そう思うね」。山岸先生はゲーテ全集出版の事を話し出されて居たのでありました。それから先生の亡くなられました後、早速に大村版など、山岸先生の下に分担訳が行われました、おもしろ除れた様に。(下略)

〔編集子附記〕ゲーテ訳者陣容の評価については、或は人によって意見もあろう。併し外部からの働きかけには一も二もなく応ずるジャーナリスト型の人と、図書堆裏に飽くまでも慎重を期して容易に発表することを肯んじない純学究型の人との行き方の相異は、ここにも明瞭に見て取れる。私は学界の、弟子達の、目にみえないおもしろとしても上田先生の死の余りに早すぎた事を思う³⁰⁾。〔(下略)は原文のまま〕

上田の死後、ちょうど昭和の改元期ごろから、「ドイツ文学者」みずからの企画と人事によってゲーテ全集やドイツ文学全集が出始めたことは事実である。しかし、それと上田の死、つまり「おもしろ」の除去などとは関係なく、まず第一には、それだけ「ドイツ文学」を生業にする人が増えたこと、そして第二には、その後すぐに円本ブームや文庫本ブームが訪れたことから分かるように、出版したいが大衆化したことが原因となっている。大正11年(1922年)の森鷗外の死も象徴的な意味をもっていたかもしれない。文学作品の翻訳は作家ではなく、ついに学者の仕事になったのである。

それにしても、正誤表の余白を埋めるには、あまり気持ちのよくない内容であろう。さらに付け加えておけば、この教え子の回想がはしなくも伝えているように、上田は人事権を一手に握っていた。当時は文科を出ても、あまり就職口がなかったのだが、大正7年(1918年)の高等学校令以後、各地に(旧制)高等学校が増設され、特にドイツ語教師の口が急激に増えたのである。『上田整次先生の思出』の中でも何度か言及されているが、校長は新任

のドイツ語教師を得るために上田に頭を下げて頼まなければならなかったし、学生は上田の言う通りに任地に赴いたわけで、このことが上田の悪評判の一因となっているらしい。だが、もちろん、このような売手市場が長く続くはずもなく、昭和の初期ころからは買手市場となっていた。つまり、上田がもっていたような人事権より、出版をめぐる人事権のほうが、弟子に対してより大きな影響力をもつようになったのである。上田は、弟子たちを組織する能力を有していなかった。上で引用した部分で、あたかもアカデミズムとジャーナリズムの対立であるかのように語られていることも、案外このような権力形態の変化にすぎないのかもしれない。だいいち、ゲーテ全集の翻訳のような「アカデミックな仕事」がもはや残されていないことが、現代の「ドイツ文学者」たちの不幸のひとつではないのか。

ここで重要なのは、ナチス文学の翻訳・紹介という仕事もまた「ドイツ文学者」たちによって組織的に行われたことである。上田の死の直後におこった変化は、「ドイツ文学者」の社会的役割（の自己理解）にとって決定的なものだった。そして、この場合の「組織」の形成において、東京帝国大学は中心的な役割を担うのだが、高橋健二じしんはこうした「組織」とはあまり関わっておらず、すでに個人的に出版界や文化界との繋がりをもっていたために、単独で行動することになった。とはいえ、高橋は、他の同業者たちの仕事を新聞の書評などに取り上げることによって援護射撃するのも忘れず、「ドイツ文学者」の社会的役割の向上をめざして奮闘する。今こそ、われわれ「ドイツ文学者」は、ナチス文学・文化についてもっと知りたいという一般読者の気持ちにこたえなければならない。「既に欲求は高まっている。今は行為が待たれているのである」³²⁾と高橋は吠えた。

ドイツ文学の日本訳は質量ともに英仏の場合にくらべ立ち遅れの観があった。しかし最近ではドイツ文学の翻訳は英仏の壘を摩すに到ったということが出来る。岩波文庫の昨年度の外国文学訳書の刊行種類は、独英それぞれ十五に対し、仏の八、露の四となっている。(中略) もちろんナチス・ド

「文学部」の問題

イツに関する訳著が刊行されない日はないといってもよい現状であるから、抜け目のない商業主義がナチス文学の邦訳を競って企てるのに不思議はないが、それは、ナチス文学とはどんなものであるかを知りたいという読者の要求に応ずるものであることも、否定できない³⁹⁾。(1941年6月)

こうした言説は、今まで日が当たらず「商業主義」にもあまりうまく乗れなかった「ドイツ文学」に特徴的なものであろう。もちろん、日本近代文学の歴史と本質から見て、追い抜くことなどありえないと思われていた英仏文学の翻訳書を、ドイツ文学の翻訳書が数において凌駕しえたのは、ひとえに政治的変化のおかげであった。そしてこの時、つまり、「ドイツ文学者」の社会的役割が問題となったとき、東京帝国大学と「異分子」高橋健二はよく似た行動をとるようになったのである。

最後の東京帝国大学独文科教授・木村謹治はけっしてジャーナリスティックな活躍をするタイプの間人ではなかったが、前の二人の教授が少々偏屈に閉じこもって、ただ自分の研究だけに没頭していたのに対し、木村は学生たちを巧みに組織した。大正15年(1926年)の春に学生の研究会を始め、やがて昭和4年(1929年)には「エルンテ」、昭和12年(1937年)からは「独逸文学」という研究雑誌を発行する(高橋健二も常任委員格で後者の雑誌に関わっている)。やがて、この二つの学術同人雑誌で次々とナチス文学の紹介がなされ、ナチスが賛美されるわけだが、そういう時の語り口は、ジャーナリズムで活躍する高橋健二以上に熱っぽく能天気で、そして滑稽に響く。いずれにしろ、木村謹治は「ドイツ文学研究」を国家のために役立てようとしたわけで、その点では、木村の登場をまっしてはじめて、独文科は「帝国大学」に真にふさわしいものとなったのである。

もちろん、ここには近代日本じたいの変化が投影されていると言えよう。木村の独文研究会が発足したころ、大学内ではマルクス主義運動の嵐が吹き荒れていたし、文壇ではプロレタリア文学が台頭してきていた。この異変の中で、帝国大学はみずからの性格をより明確にしていくのである(ただし、

文学部にはのちに法学部や経済学部でおきた休職騒動はなかったが)。当時の独文科の学生の回想によると、ある日の独文研究会には、頼まれもしないのに鹿地亘と谷一が飛びこんできて、「その方の理論で、会員一同を啓蒙するか煙にまいてくれた」³⁹⁾ こともあったという。しかし「かれらの熱心にもかかわらず受け入れ側の意識の低さのせいだ議論はうまい工合にかみ合わないままに終わった」³⁹⁾。また、ちょうどこの昭和の改元頃、中野重治（1902年生まれ）は独文科に在籍しており、自伝的小説『むらぎも』にも木村助教授が実名で登場している（因みに、中野は第四高等学校時代にも木村からドイツ語を教わった）。小説では、卒業に必要な単位を獲得するためにジタバタと動きまわる主人公を、半ば無関心、半ば心配そうにといったかんじで見守る教師として登場する木村だが、中野の同級生はこんなエピソードも紹介している。「中野氏とは、木村先生の演習『19世紀叙情詩』でもときどき一緒になった。ある日ハイネが読まれ、いつもの通りまず当番が詩人の略伝のようなものを紹介し、そのあとで指名された学生が訳読する。終わって先生がご意見を出された。その時とつぜん中野氏が『ハイネはそのように読むものではありません』と叫び、教室の空気が一瞬緊張したように見えた」³⁹⁾。そのあと一体どうなったかは残念ながら省略されているのだが、このハイネをめぐるのは、高橋健二と中野重治と木村謹治とが微妙に交錯するのである。

高橋健二の『ハイネ』が出たのが昭和6年（1931年）、木村謹治を中心に高橋も加わってハイネ全集が出始めたのが昭和8年10月、翌2月に第4巻まで出て中止、そして昭和11年に中野の『ハイネ人生読本』が出版された。昔から愛の詩人として日本でも人気のあったハイネがこの昭和ひとけた期に、本来の政治的文脈に引き戻されたのである。まずは高橋健二の『万華鏡』における回想に耳を傾けてみよう。

三省堂からハイネ伝を伝記双書に入れたいというので、それを引き受けた。（中略）三省堂との話をまとめてくれたのは、松本慎一で、彼は左翼に傾いていたから、解放の戦士としてのハイネを期待していたであろうが、

「文学部」の問題

私にはリベラルなハイネしか書けなかった³⁶⁾。

ここでもまた「リベラル」が強調されるわけだが、それが当時昭和5、6年ごろ全盛だった「左翼」に対して言われていることに注目しておこう。そして、高橋健二がこの著作をのちに引っ込め、ハイネの翻訳全集も中絶されるのは、言うまでもなく1933年のナチス政権樹立のせいである。その年の5月、ユダヤ人・ハイネの著作はナチスの焚書の犠牲となった。「高橋健二著『ハイネ』は、ハイネをよくよみ、よく調べた上の仕事ではあったが、無色中立の立場でハイネを見ていることがもの足りなくて、そのもの足りなさを中野は必ずや満たしてくれるだろう、そう思っていたのである³⁷⁾」と当時の思い出を語る和田洋一は、ハイネの翻訳全集が昭和8年（1933年）に出たことについて次のように言う。

昭和八年という時期に、日本でハイネ全集が出はじめたということは、一つの偶然であって、出版元の学藝社が高い見識、強い決断をもって全集刊行に踏みきったとはとうてい考えられない。東京帝国大学教授木村謹治を訳者グループの中にいれたということは、彼の大きな発言力を許容したということであり、そこにも学藝社の見識のなさが露呈している。どのような経過で訳者の人選が決まったかは明らかでないが、木村謹治をはじめ、ハイネにたいして愛情ももっていなければ理解ももっていないひとたちが相寄って仕事をするようになった。評伝『ハイネ』の著者高橋健二だけは訳者中の例外と考えたほうがいいが、ハイネ研究家としてすでに認められていた舟木重信に口がかからなかったのは、彼の思想的傾向が急進的であると見なされたためであろうか³⁷⁾。

和田洋一（1903年生まれ）は自由主義的雑誌とみなされた『世界文化』に関わり昭和13年（1938年）に逮捕されるのだが、それまでトーマス・マンを中心に反ナチス亡命作家を扱う論文を雑誌に発表していた。だから、その点

では、ある時期の高橋健二の仕事とは激しく対立している。にもかかわらず、ここでの和田の分析は公正で正確なものであると言えるだろう。つまり、木村を動かしていたのが東京帝国大学教授の「責任」であるならば、高橋健二の根本にあるのはいつも「愛」なのである（もちろん、問題をやっかいなものにするのはつねに「愛」のほうなのだが）。山下肇によれば、「昭和十七年卒業の私の時代には、東大の独文科ではもはやハイネとマンを卒論に選ぶことは『御法度』になっていた」³⁹⁾が、「しかし一方の京都大学の独文科においては、主任の成瀬無極教授の下で（東大はゲーテ研究の木村謹治教授で、私も卒論にはゲーテを書いた）、依然としてトーマス・マン、そのほかユダヤ系のヒトラー・ナチに追われた亡命作家たちの作品などが読み続けられる自由な雰囲気は保たれていた」⁴⁰⁾という。そして、和田洋一の仕事の土壌もそのような京都帝国大学の雰囲気であった、と山下は羨ましげに続けるのである。山下肇が昭和16年（1941年）4月発行の「独逸文学」の中で、ナチス作家としてのイーナ・ザイデルについての論文を発表している（させられている）のを見るとき、このような山下の口調が理解できないわけでもない。だが、それにしても、国家主義的な東大と自由主義的な京大というあまりにも陳腐な図式が実現されたしまったならば、それは、現実には存在していないけれど既に想像されていた図式に木村謹治や成瀬無極じしんがとらわれていたからにはほかならない。和田や山下、さらに、東大の「異分子」を自認する高橋健二もまた、この図式にとらわれつづけるのである。言うまでもなく、最大の犠牲者は木村謹治なのだが、問題の核心は（日本政府による検閲の問題を除外すれば）、ほんとうに「文学部」がこのようなナチスへの忠誠を求められていたかどうかという点にあるのではないだろうか。もし、「文学部」の僭越な「自己規制」⁴¹⁾だったとしたら（京大が見逃されて、東大だけが規制されるなどということがあるだろうか）、木村謹治の行動は悲劇から喜劇へと転落するだろう。いずれにしろ、ナチス・ドイツ政府が極東の同盟国の「文学部」にどの程度期待していたのかはほとんど明らかになっていない。

昭和8年（1933年）、ナチスが政権をとり、小林多喜二の拷問死と佐野・

「文学部」の問題

鍋山転向宣言に象徴されるように日本の左翼運動が壊滅したこの年に、木村謹治は主任教授に昇任する。のちに触れるように、戦後、木村はナチス時代の行動を批判され、怪文書が出まわるといふ事件まで起こり、昭和22年（1947年）に発足した日本独文学会からも排除されたまま⁴⁰、翌23年1月に心臓マヒで急逝してしまうのだが、全盛時代とナチス時代がちょうど重なったことはたしかに不運だったと言えよう。さらに、運が悪かったのは木村助教授の最初の教え子が就職の時期を迎えた昭和4年から数年間にわたり、大不況のため、ほとんどの卒業生が就職できなくなってしまったのである。こうしてとりあえず大学院に収容されることになった学生たちとともに、木村はドイツの「文芸学」を取り上げ、昭和8年以降には何冊かの翻訳も出版させている。ここでも木村の組織者としての能力は発揮された。木村の最後の著書が『学としての文学』（昭和22年）という題名をもつことから分かるように、方法論をとり入れることで、厳密な学問としての文学を求めようとしたわけだが、そうした木村の意図とは別に、ドイツ本国では、やがて「国学」にまでのし上がる「文芸学」はナショナリズムと、ナチス時代には最も悪い意味でのナショナリズムと分かちがたく結びついていたのである。そして、幸か不幸か、ドイツのナショナリズムを紹介し称揚することが、そのまま日本のナショナリズム賛美へとつながっていく時代に、木村謹治東京帝国大学教授は生きてしまった。

木村の死後13年たって（1960年）、教え子たちの手によって『椎の木 木村謹治先生の思い出』がやはり出版されているのだが、この本を支配しているのは静かな悲しみである。それとなくあの怪文書事件に触れつつ、木村謹治の淋しい最後が語られるのである。だが、二人の人物がその静けさを共有しようとしなない。まず一人は、最もナチス的小説と言われるハンス・グリムの『土地なき民』の翻訳者であった星野慎一で、恩師の不運を嘆くこの弟子はついあまりにもあからさまに・熱っぽく語ってしまうのだ。「先生が、ファッションで、ナチスと通謀したというでたらめな理由で、文学部の一部の学生から排斥をくっていたのだから、あいた口がふさがらない。あの時代は、或る

意味で、病的な時代だった。古いものはすべてだめだという考えが、時代思潮の底を流れていた。先生は明治気質のしみ込んだ方だったから考え方が万事につけて古風だったのは争われない。忠国愛君の精神に育った先生が戦局を深く憂慮せられたのも事実であった。が、それは、大部分の国民同様、あたりまえのことだった。それにしても、先生がナチスと通謀したなどということが、どうして考えられよう。(中略)先生にはずぶとさがなかった。先生は正直で気の小さいほうだったから、このことを非常に心痛せられていた。それが先生の死期をはやめたことはいなめない。先生は常に善意で振舞っておられたから、見えざるいじわるさが理解できなかったのだ⁴¹⁾。

静かな悲しみを踏躰ろうとするもう一人の人物は高橋健二である。彼は、星野慎一とは対照的に、ただ取るに足らないことだけを語ろうとする。関東大震災で東大が焼け落ちたあと、高橋副手の健闘で、くじに当たった独文科はバラックの研究室を一室あてがわれることになったのだという。「私が木村先生のお役に立ったことといえば、そのくらいかもしれない⁴²⁾。

誠実な高橋健二がこれほど沈黙し、何かを隠蔽しようとしたことがかつてあったらどうか。

注

- 1) 中島健蔵『昭和時代』, 1957, 岩波書店, 3頁。
- 2) 高橋健二『万華鏡』1978, 主婦の友社, 10頁・12頁。
- 3) 高橋健二『善意への郷愁』, 1978, 華書房, 231頁。高橋健二はGHQによる一方的な「公職追放」が多くの無実の罪人を作り出したことを、他の人の口を借りてそれとなく言う。「公職追放」には確かにそのような面もあったし、「公職追放」を疑問視する声も少なくない。たとえば、1954年に岸田国土が死んだときには、作家・文化人たちがこぞって、大政翼賛会文化部長の件で戦後しばらく追放となった岸田国土を二重の犠牲者として悼んでいる。だから、高橋健二にとって、追放という過去は必ずしも隠蔽すべき暗いものではなかった。追放解除後は、辰野隆の尽力によって、中央大学文学部教授に復帰している。ところで、高橋健二が伝える菊池寛のエピソードによると、追放中の菊池は、自分の小説の文庫版が出るとき、吉川英治の名を借りて、自ら解説を書いてしまったのだという。「菊池さんが、吉川英治の名を借りてまで自作の解説を書いたのは、これらの諸作を見れば、『菊池氏がリベラリ

「文学部」の問題

- ストとしてその創作によって封建思想の打破に努めたことが、ハッキリするだろう』と言いたかったからである。そういう民主的に進歩的な役割を果たした自分が、民主主義が呼号されるようになった時世で追放にあっているのは心外だったのだろう。結末でも、『戦いに破れた今日、改めて封建思想打破が叫ばれなければならぬなど、菊池氏としては、残念至極なことと思っているだろう』とうつぶんをもらしている。」(同書, 233頁。)
- 4) 青木雨彦「青木雨彦の人間万歳 言論の自由を守る“人生派”御者・日本ペンクラブ会長就任一カ月の高橋健二」,『週間朝日』1977年8月19日号, 31頁。
 - 5) 高橋健二『現代作家の回想』, 1988, 小学館, 20頁。
 - 6) 高橋, 同書, 16頁。
 - 7) 手塚富雄「孤独な木村先生」,『椎の木 木村謹治先生の思い出』所収, 1960, 郁文堂, 78頁。
 - 8) 『日本近代文学大辞典』, 1990年(第2版), 講談社, 972頁(手塚富雄の項)。
 - 9) 高橋『現代作家の回想』, 134頁。
 - 10) 高橋,『万華鏡』, 49頁。
 - 11) 中島健蔵『疾風怒濤の巻・回想の文学①昭和初年～八年』, 1977, 平凡社, 124頁。
 - 12) 中島, 同書, 164頁。
 - 13) 安田武「大政翼賛会文化部長のイヌー岸田国土論」,『戦争文学論』所収, 1964, 勁草書房, 64頁。
 - 14) 古山高麗雄『岸田国土と私』, 1976, 新潮社, 207頁。
 - 15) 菅原卓「弔辞」,『文芸』(岸田国土追悼号)1954年5月号所収, 13頁。
 - 16) 高橋,『万華鏡』, 90頁。
 - 17) 高橋健二のナチス時代の行動については、拙論「文化の陥穽・文化の反省」(桃山学院大学総合研究所刊『人間科学』第6号, 1994)を参照していただきたい。
 - 18) 戸坂潤『日本イデオロギー論』(1937年版), 1977年, 岩波文庫, 366頁。
 - 19) 中島『昭和時代』, 49頁。
 - 20) ところで、柄谷行人は近代日本において「ドイツ語は『国家』の言語であり、英語は、経済的で実用的な言語」であったことを指摘しつつ、漱石が『文学論』の中で、なぜ、一見自明とも思われる「文学とは何か」という問いにとらわれたのかを、近代日本で「英語」が担ってしまった意味性から説明しようとする。「彼(漱石)がもし英文学をやっていなかったならば、そういう疑問をもたなかっただろうと思います」。柄谷行人『〈戦前〉の思考』, 1994, 文藝春秋, 105頁。同じように、近代日本のドイツ文学研究、あるいは帝国大学独文科に固有の問題は、ドイツ語が担ってしまった意味性から考察されなければならないと思われる。
 - 21) 藤代素人「夏目君の片鱗」,『芸文』大正6年2月号所収, 151頁。
 - 22) 青木昌吉「青木先生回顧談(四) 第五高等学校の思い出」,『独逸文学』(第一

- 年第四輯) 所収, 1938年1月, 477頁。
- 23) 小原度正「上田先生の思い出」, 『上田整次先生の思出』 所収, 1956, 非売品, 106頁。
- 24) 田中梅吉「先生の学風にふれて」, 同書, 44頁。
- 25) 塩谷温「当時の独逸語の先生達」, 同書, 24頁。「大学では藤代先生と上田先生の授業を受けました。藤代先生は文学者で、訳語にも語感を出すことに苦心されました。(中略) 上田先生は語学者で、文法に従って解釈され、簡明にしてよく要領を得ましたが、藤代先生のような含蓄はありませんでした。」
- 26) 高嶺俊夫「上田先生と往時を偲ぶ」, 同書, 51頁。
- 27) 内田貢「その頃の人, その頃の事」, 同書, 129頁。
- 28) 原田和三郎「最後の弟子たち 叱られた話」, 同書, 120頁。
- 29) 高橋健二「上田整次先生の思い出」, 同書, 116頁。
- 30) 江上敏「上田整次先生の思い出」, 同書, 104頁。
- 31) 『上田整次先生の思出』・正誤表。
- 32) 高橋健二「新しい価値評価 ドイツ文学研究の方向」(『帝大新聞』1939年2月), 『文学と文化』 所収, 1942, 鮎書房, 56頁。
- 33) 高橋健二「ドイツ文学の翻訳について」(『朝日新聞』1941年6月), 同書所収, 44頁。
- 34) 石中象治「学生時代に学んだこと」, 『Brunnen』 200号(特集「1920年代のゲルマニスティック」) 所収, 1978, 郁文堂, 47頁。
- 35) 浜中英「あの頃のこと」, 同書所収, 61頁。
- 36) 高橋『万華鏡』, 47頁。
- 37) 和田洋一「『ハイネ人生読本』のために」, 中野重治全集第20巻・『月報』 所収, 1977, 筑摩書房, 6頁。
- 38) 山下肇「ゲーテ, トーマス・マンと日本近代文学」, 『日本近代文学と外国文学』 所収, 1969, 読売新聞社, 78頁。
- 39) 和田洋一はハイネ翻訳全集の中絶について、「ナチ政権が確立してすでに一年, 独逸国大使館あたりからやんわり圧力が加かったかもしれないという推測がなりたつ」と言っている。『月報』, 7頁。
- 40) 終戦直後の木村謹治の様子が, 当時独文科の学生だった中野孝次の自伝的小説には次のように描写されている。「正門までくると左右のタテカンが並んで人だかりがしていた。教授はそれが気になるが直視するのとはばかれるらしく, 首をねじまげた恰好で右を見たり左を見たりした。ちょうどそのころ研究室で戦時中のK教授の言動を批判した怪文書が話題になっていたから, タテカンなども気になるのだろう, とぼくはすぐうしろから見て思った。そうやって相変わらずそりかえりながら正門を出たとき, 市電の近づくのが見えると, K教授はいままでの傲然とした様

「文学部」の問題

子を一変させて停留所めがけてあわてふためいてよたよたと駆けだしてゆき、人びとのあいだにからだを割りこませようとした。うしろからスパイのようにK教授の一部始終を観察していたぼくのなかで、それでもまだ残っていた畏敬の念の最後のかけらが、プツンと潰れるのをそのとき感じた。このK教授のふるまいこそかつての威厳で硬化した帝国大学というものの象徴のような気さえした。」（中野孝次『険しい朝』、小説集『苦い夏』所収、1980、河出書房新社、97頁）

戦時中木村のもとで助教授をつとめた相良守峰の回想録では次のように記されている。「東大でも教職適格検査というものが行われた。これはどこでだれが行ったのか知らないが、おそらく学生が原告ないし検事役で、大学または学部当局が弁護士または判事の役をしたものでもあろうか。それが学生新聞などに大きく書き立てられ、追放すべしと槍玉に五人ほどの教授の名前も出ていた。（中略）ナチスと近づき過ぎたといって、弾劾された教授もあった。私も学部長からある教授のことをきかれ、意見を求められたが、同じ学部の同僚のことではあるし好人物なので、弁護につとめ、穏便の処置を求めておいた。そして幸いこの件はことなきを得た。」（相良守峰『茫々わが歲月』、1978、郁文堂。91頁）また、昭和22年春の独文学会設立のさい、木村が加われなかった事情についても記している。「それでこの日、二十名ほどの人に招集状を出し、東大研究室関係者のほかに、成瀬清（無極）、上村清延、吹田順助などの長老も参会されたが、木村教授は出られなかった。全国的学会設立についてのほか、近く刊行するはずの東大独文学会の機関誌『独逸文学』についても話しあったが、武村次郎、滝崎安之助、小滝穆などの若い世代の人々が言葉するどく革新的な意見を吐き、例えば木村先生が、不日刊行予定の機関誌第一号のために執筆されている『文学の世界性』というのは、ゲーテの世界文学の理念を説いたもので、右翼的とか封建的とかいうものではないのに、やはり今のところ遠慮された方がよいというような意見が支配的で、長老組はちょっと辟易の体に見えた。」（同書、95頁）

- 41) 星野慎一「先生の最後の外出」、『椎の木 木村謹治先生の思い出』所収、123頁。
- 42) 高橋健二「木村謹治先生の思い出」、同書所収、76頁。

Weit entfernt von der Literatur
—Kenji Takahashi und die Kaiserliche Universität Tokio—

Rieko TAKADA

Resümee

Kenji Takahashi (1902~) gilt in der außerwissenschaftlichen Öffentlichkeit als ein Exponent der japanischen Germanistik. Seine rege publizistische Tätigkeit, besonders die als Kommentator der nazistischen Literatur, wurde aber in der fachinternen Welt oft kritisiert. Und auch Takahashi selber verstand sich als Außenseiter seiner Disziplin. Für Takahashi, der schon als Student persönlichen Kontakt mit japanischen liberal gesinnten Literaten hatte, war der Akademismus der Kaiserlichen Universität fremd. Daß wahrer Akademismus und öffentlichkeitswirksamer Habitus Gegensätze darstellen, ist lediglich ein geläufiges Schema. Wichtig ist die Tatsache, daß trotz dieser Gegensätze Takahashi und die Kaiserliche Universität Tokio bei der Einführung der nazistischen Kultur zusammenwirkten. In dem vorliegenden Aufsatz soll untersucht werden, wie und warum diese seltsame Kollaboration entstehen konnte.

In der Nazi-Zeit sahen Takahashi und auch Kinji Kimura (Ordinarius am Germanistischen Seminar der Kaiserlichen Universität Tokio) die Legitimation der japanischen Germanistik, die sich an der national-völkischen Germanistik des Dritten Reiches orientieren müsse, extern begründet, d.h. als Beitrag zur Bildung des japanischen Nationalismus. Sowohl Takahashis Liberalismus, als auch Kimuras Akademismus waren plötzlich nicht mehr vorhanden. Gerade ein

「文学部」の問題

solcher Legitimationsdruck bildet den Kern der Geschichte der japanischen Germanistik, was notwendigerweise in der Nazi-Zeit ans Licht kam.

Die Philosophische Fakultät nahm in der Hierarchie der Kaiserlichen Universität, deren Ziel in der möglichst schnellen Modernisierung Japans bestand, den untersten Platz ein. Gleichzeitig war die Philosophische Fakultät, besonders das Germanistische Seminar, weit entfernt von der zeitgenössischen literarischen Szene. Die moderne Literatur, die mehr oder weniger die einseitige Modernisierung scharf kritisierte, stand im Gegensatz zum Prinzip der Kaiserlichen Universität. Die Philosophische Fakultät an der Kaiserlichen Universität wurde also doppelt als Versager stigmatisiert.

Hinzuzufügen ist hier, daß die deutsche Sprache, ganz getrennt von der deutschen Literatur, bei der Verwestlichung des modernen Japan eine besondere Rolle spielen mußte. Deutschlehrer zu sein, hat damals die Zerrissenheit der japanischen Intellektuellen symbolisiert.

Der Grund dafür, warum japanische Deutschlehrer (Germanisten) so unkritisch mit den Nationalsozialisten zusammenarbeiteten, kann in der unglücklichen Entstehungsgeschichte der japanischen Germanistik selbst gefunden werden.